

# 南島と隼人

## —文武4年覓国使剽劫事件の歴史的背景—

竹 森 友 子\*

はじめに

『続日本紀』（以下『続紀』と略記する）の文武4年6月庚辰条、いわゆる覓国使剽劫事件とは、薩摩半島北部に居住の薩末比売・久売・波豆、薩摩半島南端居住の衣評督・助督の衣君、大隅半島西岸部居住の肝衝難波、そして肥人が連合して南島へ派遣された覓国使を剽劫したという事件である。なぜ南島に対する覓国使を南部九州の隼人が剽劫したのかについて、①南島覓国使には隼人の居住地への国制施行のための調査が課せられていたため、それに対する隼人の反発とみる説<sup>(1)</sup>、②「南島路」開拓に伴う「覓国使」の評設置の強行に対し、隼人と南島の反対勢力が新たに形成した政治的な交通関係をもって国家に抵抗したとみる説<sup>(2)</sup>、③南島との交易を通じた関係での隼人の優位性が、大和政権の登場により崩壊することに隼人は反発したとみる説が存在する<sup>(3)</sup>。

②③の説は、隼人と南島との交通を重視する説であるが、両者の交通についての具体的な追究はない。事件の背景に南島と隼人の交通を認めるならば、事件に参加した隼人と南島との交通が確かめられなければならない。そこで、南海産貝輪の北部九州を中心とし、南島・南部九州・本州を結ぶ流通ルートの復元を精力的に行われている、木下尚子氏の研究を参考とし、南海産貝輪に注目して隼人の居住地である南部九州と南島との交通の復元をおこないたい。なお、ここでは南島を大隅諸島～沖縄諸島（南西諸島）の総称として用いることとする。

### 1 貝交易における南島と南九州

木下氏は、南島出土の貝輪にはしばしば弥生土器・弥生系土器を伴うことから、伴う遺跡とそうでない遺跡から南海産貝輪を2つに区分された。伴わないのが南島在来の貝輪であり、伴うのが“貝の道”（弥生時代以来南島と九州・本州の間に行われた貝交易のルート）に関係する貝輪であるとみる<sup>(4)</sup>。本稿では“貝の道”に関係する貝輪に注目し、隼人と南島との交通を復元したい。

“貝の道”を素材の供給地・中継地・消費地に分けた場合、素材の供給地が南島<sup>(5)</sup>、中継地が南部九州<sup>(6)</sup>となり隼人と関係する。貝輪出土遺跡から出土する弥生土器と、中継地と思われる遺跡に注目すると、弥生前期～中期前半と弥生中期後半～後期後半で変化がみられる。以下に詳述したい。島々の位置関係については、註の前に図を付しておいたので参照されたい。

#### ① 弥生時代前期～中期前半

この時期の南島の貝輪出土遺跡から出土する弥生土器は、高橋式土器・入来式土器が多い<sup>(7)</sup>。

\*比較文化学専攻

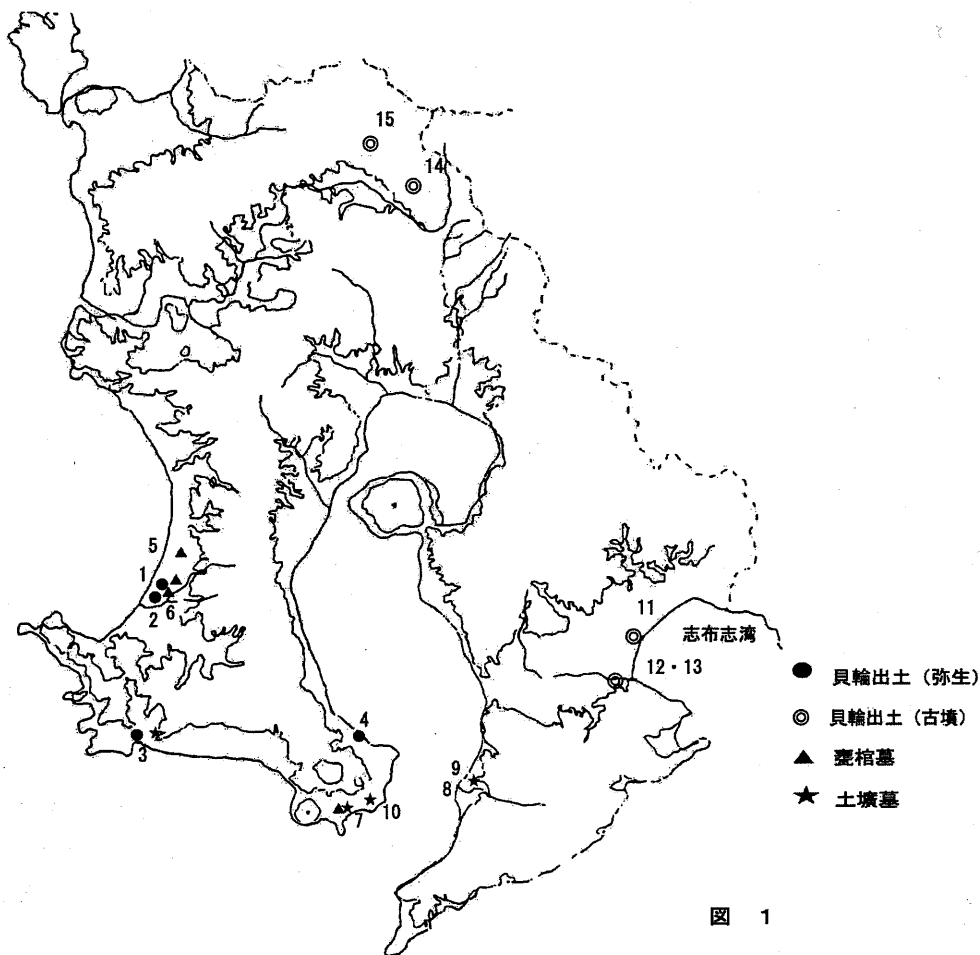


図 1

遺 跡 名	時 期	所 在 地	遺 構 ・ 遺 物	文 献
1 下小路遺跡	(弥) 中期後半	南さつま市金峰町高橋下小路	甕棺 (須玖式) 葬遺構・ゴホウラ貝輪	■□
2 高橋貝塚	(弥) 中期	同町高橋	ゴホウラ・オツタノハ貝製輪未製品	□
3 松ノ尾遺跡	(弥) 終末～ (古) 初頭	枕崎市沙見町松ノ尾	土壊墓・立石 (埋葬遺跡)・立石・ゴホウラ・オツタノハ・イモガイ製貝銅	●□▲
4 横瀬遺跡	(弥) 後期	指宿市西方	住居跡。笠利町金久遺跡と土器群が共通	●
5 白寿遺跡	(弥) 中期	日置市吹上町中之里	甕棺 (須玖式) 葬遺構	■
6 阿多貝塚	(弥) 中期	南さつま市金峰町阿多	甕棺 (立岩古式) 葬遺構	■
7 成川遺跡	(弥) 中期後葉、 4～6 世紀	指宿市山川町成川	立石に山ノ口式土器・須玖式土器供献 (祭祀遺跡)、立石・甕棺 (単棺)・土壊墓 (埋葬遺跡)	●▲
8 山ノ口遺跡	(弥) 中期後葉	錦江町馬場山ノ口	立石に山ノ口式土器・須玖式土器供献 (祭祀遺跡)	●
9 城元遺跡	(古)	同町城元	7 と同様の埋葬法 (立石はみられず)	●
10 大山崎遺跡	(古)	指宿市十二町大山崎	土壊墓 (埋葬遺跡)	○
11 神領古墳群	6 世紀カ	大崎町横瀬	地下式横穴墓。イモガイ製貝銅	☆
12 横間古墳群 9 号墓	6 世紀カ	肝付町新富	地下式横穴墓。貝種不明の貝銅	☆
13 上ノ原地下式横穴 9 号墓	6 世紀カ	同町前田	地下式横穴墓。イモガイ製貝銅	☆
14 馬場地下式横穴	6 世紀カ	湧水町鶴丸	地下式横穴墓。イモガイ製貝銅	☆
15 瀬ノ上地下式横穴	6 世紀カ	大口市青木	地下式横穴墓。貝種不明の貝銅	☆

表 1 遺跡一覧 (番号は図 1 に対応する)

文献の略号は次の通り：■藤尾「九州の甕棺」(『国立歴史民俗博物館報告』21、1989)、□木下「鹿児島県の貝文化」(『鹿児島県考古』33、1999)、●河口「日本の古代遺跡 38」(保育社、1988)、○上村「墓制からみた隼人世界」(『新版 古代の日本 3』(角川書店、1991)、☆木下「国家形成と貝の道」(『南島貝文化の研究』法政大学出版局、1996)、▲「先史・古代の鹿児島 (資料編)」(鹿児島県教委、2005)。

高橋式土器は、鹿児島県南さつま市金峰町高橋に所在する、高橋貝塚出土の土器を標式とする、板付式系土器と刻目突帯文系土器から構成される、弥生時代（以下はこの指摘は省略する）前・中期の土器である<sup>(8)</sup>。両者とも資料に恵まれず分布範囲は不明であるが、薩摩半島の西岸部に分布することは確かであろう。

また、この時期に鹿児島県下で貝輪を出土する遺跡は、高橋貝塚と下小路遺跡である（表1・図1参照）が、どちらも南さつま市金峰町高橋に所在している。高橋貝塚からは貝輪の未製品が出土しており、貝輪の加工地と考えられる。下小路遺跡は高橋貝塚から300メートル離れた地点にある、弥生中期後葉の甕棺墓地である。甕棺内で成人骨の一部とその右腕に通ったゴホウラ貝輪（諸岡型）が2個発見された<sup>(9)</sup>。

以上見てきたように、前期～中期前半の貝輪交易の中継地は薩摩半島西岸部であるが、この地域に展開する葬制が甕棺墓である。日置市吹上町（白寿遺跡）・金峰町（下小路遺跡・阿多貝塚）からⅢ期（須玖式・立岩古式）の甕棺墓が発見されている<sup>(10)</sup>。吹上町・金峰町を中心とした西岸部には、貝交易に関係し葬制を共通するという共同性が存在していたと言えよう。

木下氏は、福岡平野では、南海産貝輪が初現する中期中頃のゴホウラ諸岡型貝輪の型式が固定しない時期から定式化する時期にいたるまで、一系の形態変化をたどることが出来ることから、貝輪交易の主催者を福岡平野（福岡平野を中心とし、東は粕屋郡・西は福岡市西区・南は筑紫野市を含む平野域）人と考えられた<sup>(11)</sup>。北部九州では貝輪と甕棺墓の分布は地域が一致し<sup>(12)</sup>、甕棺墓制と貝輪は密接な関係にあることがわかるが、福岡平野域は甕棺墓の集中する地でもあり、妥当な見解であると思う。

最後に素材となる貝の供給地であるが、弥生土器の出土状況から、前期は奄美大島の笠利半島や沖縄本島東中国海側が考えられ、中期は前述の2地域と徳之島の東南沿岸部などが考えられる<sup>(13)</sup>。種子島からも貝輪や弥生系土器が出土しているが素材の供給地というよりは寄港地ととらえてよいのではなかろうか。

以上によりこの時期の薩摩半島西岸部の集団は、種子島－奄美大島（笠利半島）－徳之島（東南海沿岸部）－沖縄本島（東中国海側）と交通関係を有していたことがわかる。しかし、これらの交通は弥生時代に開始されたのではない。縄文時代後期中葉の市来式土器は、奄美大島・徳之島・沖縄県にまで達しており<sup>(14)</sup>、いちき串木野市市来の市来貝塚や金峰町山野原遺跡では、奄美の土器に類似する土器片出土の報告がある<sup>(15)</sup>。また、万之瀬川河口では奄美系土器が発見されている<sup>(16)</sup>ことから、縄文時代後期に交通が開始されていた<sup>(17)</sup>ことがわかる。

なお、木下氏は貝輪交易における運搬は、素材の供給地から消費地にいたるまで一貫して西北九州人が行っていたとされる<sup>(18)</sup>が、供給地から中継地までの運搬にたずさわったのは、縄文後期にすでに南島との交通関係を有していた薩摩半島西岸部の集団であると想定しておきたい。

## ②弥生時代中期後半～後期

この時期に南島の貝輪出土遺跡から出土する弥生土器は、山ノ口式土器が目立つ<sup>(19)</sup>。山ノ口式土器は鹿児島県錦江町馬場山ノ口所在の山ノ口遺跡を標式遺跡とする中期後半の土器様式である。分布の特徴として、大隅半島と薩摩半島の東岸の一部で発達し、薩摩半島西岸部ではこの時期、系統を異にする土器様式（松木蘭式土器）<sup>(20)</sup>が成立していたと考えられている<sup>(21)</sup>。

この時期に鹿児島県本土で貝輪を出土するのは、日置市金峰町の下小路遺跡と枕崎市汐見町の松之尾遺跡（弥生終末期～古墳時代初頭）である。松之尾遺跡からは山ノ口式土器とともに具志原遺跡（伊江島）出土の免田式土器と同タイプの免田式土器が出土しており<sup>(22)</sup>、南島との交通をうかがうことができる。現在のところ、薩摩半島で山ノ口式土器が出土しているのは、指宿市山川町の成川遺跡と指宿市西方の横瀬遺跡である。横瀬遺跡では、奄美市笠利町金久遺跡と土器群が共通し、成川遺跡の弥生中期後葉の祭祀遺跡では松之尾遺跡や対岸の山ノ口遺跡と同様の葬法<sup>(23)</sup>をとっていると言う。

以上から、新たに貝輪交易に薩摩半島南端部の集団も関わるようになり、かつ大隅半島西岸部の集団も貝輪交易に関与した可能性が考えられる。松之尾遺跡や横瀬遺跡の南島と共通する土器や、南島の貝輪出土遺跡から山ノ口式土器が多く出土するという事実を鑑みれば、貝輪交易の中継地は薩摩半島南端部に移ったと考えてもよいのではなかろうか。薩摩半島南端部には古墳時代に土壌墓が展開し（表1、図1参照）、それは山ノ口式土器を出土した地域と分布が重なる。つまり、薩摩半島南端部には貝交易に関わり葬制を同じくするという共同性が存在していた。また、錦江町の城元遺跡でも同様の埋葬方法が行われている<sup>(24)</sup>。よって薩摩半島南端部と大隅半島西岸部は、中期後半～古墳時代にかけて交通関係を有していたと言えよう。

木下氏は、前期～後期にかけて貝輪の中継地を薩摩半島南部とひとまとまりとしてとらえておられる<sup>(25)</sup>。しかし、これまでの考察から前期～中期前半は、中継地かつ貝交易に関わったのは薩摩半島西岸部の集団であり、中期後半～後期の中継地は同半島南端部、交易に関わったのは南端部と大隅半島西岸部の集団へと変化したと考える。貝輪の素材の供給地は、基本的には中期前半での地域を引き継ぐと考えられる<sup>(26)</sup>。

### ③古墳時代

古墳時代の最大の特徴は、薩摩半島において貝輪の出土が無くなること<sup>(27)</sup>と、種子島（広田遺跡）を消費地とする貝交易ルートの出現である。まず、後者から説明していく。

広田遺跡を消費地とする貝交易は弥生時代後期後半に始まる。広田遺跡は、南種子町平山広田に所在する弥生時代後期後半～古墳時代後期（7世紀を含む）の埋葬遺跡であり、人骨157体に総数約44000個の貝製品が検出された<sup>(28)</sup>。人骨には多くの貝製品（貝輪・貝符など）が伴う<sup>(29)</sup>。現在種子島で貝を採取・加工した痕跡は知られず<sup>(30)</sup>、素材の供給地は他地域であることがわかる。供給地としては、広田型貝符の分布や貝集積と弥生土器新開地の重なりという点から、笠利半島（奄美大島）や東中国海上の南部島嶼・勝連半島付近の沿岸部・伊江島（以上沖縄）が考えられている<sup>(31)</sup>。すなわち、弥生時代後期後半～古墳時代の種子島（広田）の集団は、奄美や沖縄と交通関係を有していたと言えよう。

鹿児島県本土で古墳時代の貝輪の出土が見られるのは、大隅半島の志布志湾岸と熊本と宮崎との県境にあたる大口盆地である（図1参照）。結論から言えば、志布志湾岸の集団が貝交易に関わったと考える。

南島において、現在までにこの時期の貝釧を出土するのは、いずれも種子島である。弥生時代後半～古墳時代初頭の埋葬遺跡である鳥ノ峰遺跡（中種子町増田中之町）では、人骨が26体分検出されており、人骨には多くの貝製品が伴っている<sup>(32)</sup>が、そこから出土する確実に搬入品と言え

る土器は、いずれも東九州系の壺であり、豊後地方に分布の主体をもつ壺や、人吉地方を中心に分布する免田式の長頸壺など<sup>(33)</sup>、貝輪を出土する横穴墓と地域が重なる点が示唆的である。種子島との地理的・歴史的関係から考えれば大隅半島との関係が強いのではないかと推測されている<sup>(34)</sup>。

中・近世における南島と本州を結ぶルートとして、種子島－大隅の大泊・志布志－日向－大坂という東岸ルートが存在していた。トカラ・奄美へと向かうためには、一旦屋久島を中継しなければならないため、東岸ルートは種子島で途切れるという<sup>(35)</sup>。このように、大隅半島（志布志湾岸部）と種子島とのつながりは深い。天長元（824）年に多禰島が大隅国に属するようになる<sup>(36)</sup>のもそのことを示すように思う。

弥生後期後半以降の種子島には、弥生前期以来の南島と薩摩半島経由で北部九州を結ぶ西岸ルートと、大隅半島経由で北部九州とを結ぶ東岸ルート、種子島を終着地とする南島内で完結する交通など、3つの交通関係が存在していたと言える。以上、考古学の成果から、寛国使剽劫事件が起こるまでの南島と南部九州との交通を整理した。

## 2 天武～文武期の南島・隼人政策

次に文献史料における南島・隼人関係の記事を分析していきたい。（なお、7世紀前半の南島関係記事については別稿を用意することとし、ここでは天武～文武期の分析を行いたい。）

天武期後半以降、隼人の居住地への律令制導入政策が本格的に展開したことは誰しも認めるところであるが、注目すべきは多禰島人の来朝や使者を派遣しての多禰島の探索など、多禰への政策が先行していることである（表2参照）。多禰に吏が置かれ、「国」に準じる存在となったのは大宝2年頃（表2-24）と考えられているが、永山氏は多禰島が「国」に準じる行政区画として設置されたのは、①軍事（防衛）上の要地であること（＝多禰を政情未だ不安定な九州南部と別々の行政区画に編成し、両地域を分断支配することによって、律令国家の版図として支配を安定させる）、②国際的交通の要衝であること（＝遣唐使入唐航路と関連）によると指摘した<sup>(37)</sup>。

交通という点では、多禰島に存在する3つの交通関係が重要であろう。大隅・阿多隼人や掖玖・阿麻弥人の来朝（表2-5・6）が可能となったのは、多禰への使者派遣と探索（表2-2・3）と関係するのではなかろうか。沖縄から九州を結ぶ交通ルートの中継地として多禰が重要な役割を果たしていたことによる。つまり、律令国家の建設を目指す天武が、まず多禰に使者を派遣したのは、多禰の持つ交通機能に関係すると言えよう。

天武8（679）年の遣使の2年後、使人によって多禰島の地図がもたらされ、3年後には大隅・阿多隼人の朝貢が行われた（表2参照）。『日本書紀』（以下『書紀』と略記する）を見ると天武13（684）年2月に信濃への遣使があり、地形が調査され、同年閏4月には使人により信濃国の地図がもたらされた。そして、4年後の持統6（688）年には蝦夷の朝貢が行われた。信濃国はその当時蝦夷の国である越国と境を接していた。また、使者が派遣されてから朝貢まで4年というのは期間があき過ぎのようだが、その間に天武の死をはさみ朝貢儀礼が行われなかったであろうことを考えると、持統2年の蝦夷の朝貢は天武13年の遣使の結果なのではないか。すなわち、天武・持統期には蝦夷・隼人について同様の政策が展開していたと言えよう。

	年	月	日	南 島 関 係	隼 人 関 係
1	同 6 (677)	2		多禰嶋人等を飛鳥寺の西の槻の下に饗す。	
2	同 8 (679)	11	己亥	倭馬飼部連(大使)・上寸主光父(小使)を多禰嶋に遣わす。	
3	同 10 (681)	8	丙戌	2の使人、多禰国図を貢ぐ。	
4	同	9	庚戌	多禰嶋人等を飛鳥寺の西の河辺に饗す。	
5	同 11 (682)	7	甲午		隼人多来、方物を貢ぐ。大隅・阿多隼人、朝廷で相撲をとる。大隅隼人が勝つ。
6	同	7	丙辰	多禰人・掖玖人・阿麻弥人に賜祿。	
7	同	7	戊午		隼人等を飛鳥寺の西に饗す。
8	天武12 (683)	3	丙午	多禰に遣わす使人等帰る。	
9	同 14 (685)	6	甲午		大隅直ら11氏に忌寸賜姓。
10	朱鳥元 (686)	5	丙寅		大隅・阿多隼人、誅す。
11	持統元 (687)	5	乙酉		隼人の大隅・阿多の魁師、己衆を率い互いに率い誅す。
12	同	7	辛未		隼人の大隅・阿多の魁師等337人に賜物。
13	同 3 (689)	1	壬戌		筑紫大宰、隼人174人・布50常・牛皮6枚・鹿50枚を献ず。
14	同 6 (692)	閏5	己酉		沙門を大隅と阿多に遣わし、仏教を伝える。
15	同 9 (695)	3	庚午	文忌寸博勢・訳語諸田等を多禰に遣わし、蛮の居所を求めしむ。	
16	同	5	己未		隼人大隅を饗す。
17	同	5	丁卯		隼人の相撲を西の槻の下に観る。
18	文武2 (698)	4	壬寅	文忌寸ら8人を南嶋に覓国の為に遣わす。	
19	同 3 (699)	7	辛未	多勢・夜久・奄美・度感等朝幸に従い来朝。方物を貢ぐ。	
20	同	8	己丑	南嶋の献物を伊勢大神宮及び諸社に奉る。	
21	同	11	甲寅	34の使人、南嶋より至る。	
22	同	12	甲申		大宰府、三野・稲積城を修造させる。
23	同 4 (700)	6	甲辰		薩末比売・久売・波豆・衣評督衣君県・助督衣君弓自美、又肝衝難波、肥人等を従え、兵によって覓国使を剽劫する。
24	大宝2 (702)	8	丙申朔	薩摩多勢、命に逆らう。兵を發して征討し、戸を校して吏を置く。	左に同じ。
25	同	9	戊寅		薩摩隼人を討つ軍士に授勲。

表2 天武～文武期の南島・隼人関係記事 (出典は17までは『日本書紀』、18以降は『続日本紀』)

天武・持統期の多禰への遣使、それによる多禰人や隼人の朝貢を征服過程と復元する説も存在する<sup>(38)</sup>。しかし、天武・持統期における南島・隼人関係記事に反乱を示す記事は存在せず(表2参照)、蝦夷に関しても同様のことが言える。この段階での遣使の目的は、地形などの調査や入貢の促進であり、大規模な派兵は行われていなかったと考える。

だが、文武期になると「遣<sub>二</sub>務広式文忌寸博士等八人于南嶋<sub>一</sub>覓<sub>二</sub>国<sub>一</sub>、因給<sub>二</sub>戎器<sub>一</sub>」と、武器を携える等それ以前とは段階を異にしていることがわかる。注目すべきは、遣使が行われた翌年に南島からの朝貢があったが、文忌寸らは薩摩半島と大隅半島居住の隼人によって攻撃されていることである。

隼人による覓国使剽劫に関しては、遣唐使の南島路開発と、国郡制導入をめざして隼人社会内部にまで踏み込む調査が行われていたためと解釈されている<sup>(39)</sup>ことは前述した。696年5月に契丹の李尽忠・孫万榮がおこした乱により、河北道から遼東半島にまたがって混乱していた。この混乱は698年の時点でも継続しており、遼東半島・山東半島を経由する北路を避けて、南島路の開発が課題となった<sup>(40)</sup>と思われ、また「覓国」とあるように、国設置のための調査が遣使の目的であるのは確かであろう。だが、重要なのは国郡制の施行によって隼人が失うものである。結論から言えば、隼人が有していた南島との交通機能を国家に掌握されることへの反発であると考えられる。

「薩末比売・久売・波豆、衣評督衣君縣・助督衣君弓自美、又肝衝難波、從<sub>二</sub>肥人等<sub>一</sub>持<sub>二</sub>兵剽劫<sub>一</sub>覓<sub>二</sub>国使刑部真木等<sub>一</sub>。於<sub>二</sub>是勅<sub>一</sub>筑志総領、准<sub>二</sub>犯決罰<sub>一</sub>。」と、覓国使剽劫事件に関わっている隼人は薩末・衣君、肝衝氏と肥人であり、次章ではこれらの隼人を含めた隼人の本拠地と南島との関係を見て行きたい。

### 3 南島と隼人

#### ①阿多隼人と大隅隼人

7世紀後半における隼人をさす呼称に、阿多隼人と大隅隼人があり、両者は度々並称される。このような並称は8世紀になると薩摩隼人と大隅隼人に変化するが、薩摩と大隅は国制にもとづく呼称であり、薩摩隼人は薩摩国の隼人、大隅隼人は大隅国の隼人を意味する<sup>(41)</sup>。では、阿多隼人と大隅隼人は8世紀の薩摩隼人・大隅隼人と同一であると考えてよいであろうか。

まず「阿多」という呼称が何を示すかであるが、薩摩国のうちの半島部を主体とする呼称<sup>(42)</sup>、または薩摩半島南部の呼称<sup>(43)</sup>であると考えられている。従来の説では、「阿多」をかなり広範囲にとらえているが果たしてそうであろうか。

『書紀』持統元（687）年5月乙酉条

a 賞=賜隼人大隅阿多魁帥等三百卅七人。各有<sub>レ</sub>差。

『書紀』持統6（692）年閏5月己酉条

b 詔=筑紫大宰河内王等曰、宜遣<sub>二</sub>沙門於大隅与<sub>二</sub>阿多<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>伝<sub>二</sub>仏教<sub>一</sub>。

『延喜式』隼人司大衣条

c 凡大衣者、擇<sub>二</sub>譜第内<sub>一</sub>、置<sub>二</sub>左右各一人<sub>一</sub>。（大隅為<sub>レ</sub>左、阿多為<sub>レ</sub>右。）

aによると、阿多隼人集団を率いる魁帥が存在していることがわかる。1章①②で述べたように、薩摩半島の西岸部と南端部では、それぞれに共同体的まとまりが存在していた。また、薩摩半島北部を本拠地とする薩摩氏や、南端部を本拠地とする衣君氏が覓国使剽劫事件（表2-23）に参加しているのに対し、西岸部を本拠地とする阿多氏の参加は見られない。よって、阿多隼人の魁帥とは、薩摩半島に存在した隼人集団を率いた首長ではなく、限られた地域の隼人集団を率いた首長であると思われる。bに関しても、沙門が遣わされた「阿多」とは、漠然と薩摩半島のどこかということではなく、具体的な地域を示す<sup>(44)</sup>と考えてよからう。cからは、隼人司の大衣は阿多・大隅の譜第の家から選ばれていることがわかる。隼人司は大宝令制下の成立であるが<sup>(45)</sup>、その前身官司は天武期に成立したと考えられている<sup>(46)</sup>。8世紀には阿多隼人に代わって薩摩隼人が登場するにもかかわらず、譜第の家を大隅と阿多とすることから、天武期の成立であると言えよう。

以上により、阿多隼人とは阿多君一族とその配下であり（海幸山幸神話において、『古事記』では火闌降命が隼人の祖とされ、『書紀』本文では「吾田君小橋等本祖也」とされているのはそのことを示すのではなかろうか）、地域的にも限定されていると考える。

では、「阿多」とはどの地域を示すのであろうか。『和名抄』に記載されている阿多郡は鷹屋・田水・葛例・阿多郷からなり、現在の南さつま市金峰町・日置市などの地域に比定されている<sup>(47)</sup>。8世紀以降隼人のほとんどは地名を姓としているが（表3参照）、加志君と佐須岐君以外はその地名は郡名と一致する。7世紀後半の阿多隼人の「阿多」は、前述の阿多郡に一郷で郡をなす伊祚郡（現日置市吹上町）を加えた程度であろう。つまり、薩摩半島の西岸部ということになる。

表3を見れば、畿内に移住した阿多隼人の存在を確認できる。隼人の畿内への移住に関しては、5世紀末～6世紀初頭頃とする説<sup>(48)</sup>も存在するが、天武期頃とする説<sup>(49)</sup>がよいと思う。表2-6

国	年 代	人 名	記 事	備 考	出 典
薩摩	文武4 (700)	薩末久亮	南島覺国使を剿劫。	薩摩郡カ	続日本紀
	同上	薩末波豆	同上	同上	同上
	同上	薩末比亮	同上	同上	同上
	天平8 (736)	薩摩君宇志カ	薩摩郡カ主政。外少初。	同上	大日古2-20
	天平宝字8 (764)	同上	相替により外正6上→外従5下。	同上	続日本紀
	天平8 (736)	薩摩君須加	阿多郡主帳。無位。	阿多郡	大日古2-20
	同上	薩摩君鷹□	阿多郡少領。外従8下勲10等。	同上	同上
	天平宝字8 (764)	薩摩公鷹白	相替により外正6上→外従5下。	同上カ	続日本紀
	神護景雲3 (769)	同上	俗伎を奏し外従5上。	同上カ	同上
	天平8 (736)	薩摩君福志麻呂	薩摩郡カ大領。外従6下。	薩摩郡カ	大日古2-19
	天平10 (738)	薩摩君国益	右大舍人。無位。		大日古2-20
	神護景雲3 (769)	薩摩公久奈都	俗伎を奏し外正6上→外従5上。		続日本紀
	宝龜7 (776)	薩摩公豊継	同上		同上
	不明	薩摩豊継	画師。		S34正倉院展目錄
	不明	薩摩君相楽	火闌降命6世孫。阿多御手犬養の祖。		新撰姓氏錄
	神護景雲3 (769)	飯準人麻比古	俗伎を奏し外正6上→外従5上。	飯島郡カ	同上
	不明	吾田君小橋	火闌降命の子。		日本書紀
	天平5 (733)	阿太肥人床持亮	右京の戸主椋伊美吉の戸口。		大日古1-499
	天平14 (742)	阿多準人東人	滋賀郡古市郡戸主大友担波史の戸口。	古市郡	大日古2-329
大隅	同上	阿多準人乙麻呂	同上。東人の兄。	同上	同上
	同上	阿多準人加都伎	同上。乙麻呂の弟。	同上	同上
	同上	阿多準人刀自亮	同上。乙麻呂の兄。	同上	同上
	天平宝字6 (762)	阿太廣公	造石山院所の雇工。		大日古15-448
	天平7 (735)	山背国準人、準人美止美の戸口。			大日古1-648
	文武4 (700)	衣君縣	南島覺国使を剿劫。衣評督。	額姪郡	続日本紀
	同上	衣君豆自美	同上	同上	同上
	天平元 (729)	加志君和多利	始羅郡少領。調物を貢ぎ外従7下勲7等→外従5下。	始羅郡	同上
	神護景雲3 (769)	加志公嶋麻呂	俗伎を奏し外従5下→外従5上。		同上
	和銅3 (710)	曾君細麻呂	日向準人。荒俗を教諭し、聖化に馴服せしめた功により外従5下。		同上
	天平8 (736)	曾県主麻多	薩摩郡カ主帳。外少初下勲10等。	薩摩郡カ	大日古2-19
	天平12 (740)	贈嶺君多理志佐	藤原広嗣の叛に際し、広嗣側に加わっていたが、官軍に降服。		続日本紀
	天平勝宝元 (749)	曾県主岐直加爾志佐	御調を貢し、外正6上→外従5上。		同上
	同上	曾県主志自羽志	同上		同上
	神護景雲3 (769)	曾公足麻呂	俗伎を奏し外正6上→外従5上。		同上
	延暦12 (793)	曾乃君牛養	曾於郡大領外正6上→外従5下。準人を率いて入朝。	曾於郡	類聚国史
	天平6 (734)	大住忌寸足人	山背国準人、準人公首麻呂の戸口。		大日古1-646
	天平7 (735)	大住忌寸山守	同上		同上
大隅	天平10 (738)	大隅直坂麻呂	大隅国左大舍人。無位。		大日古2-131
	天平7 (735)	大住準人黒亮	山背国準人、準人小君戸口。戸主の妾		大日古1-650
	同上	大住準人 亮	山背国準人、準人大麻呂戸口。		大日古1-644
	神護景雲3 (769)	大住直倭	俗伎を奏し外正6上→外従5上。		続日本紀
	宝龜7 (776)	同上	外従5上に。		同上
	宝龜6 (775)	大住忌寸三行	準人正になる。		同上
	宝龜7 (776)	同上	俗伎を奏し外正6上→外従5上。		同上
	8世紀後半	大隅忌寸公足	左大舍人。少初下→少初上。		大日古4-60
	天平元 (729)	佐須岐君夜麻等	調物を貢ぎ外従7下→外従5下。		続日本紀
	天平15 (743)	佐須岐君久久亮	石原宮で饗を賜う。外従5下→正5下。		同上
国	文武4 (700)	肝衝難波	南島覺国使を剿劫。	肝属郡カ	同上

表3 地名を姓とする準人 (大日古1-19=「大日本古文書」1巻 19頁)

を見れば阿麻弥人が朝貢しているが、トカラ～奄美諸島においては西側航路が発達している。そしてそのコースは薩摩半島と結ぶ<sup>(50)</sup>ことから、天武・持統期の多禰への遣使や南島人の朝貢の際に中継地となったのは薩摩半島のミナトではないかと考えられ、また、阿多の地に沙門が遣わされ拠点化がはかられる<sup>(51)</sup>など、ミナトは阿多地域であると言えるからである。天武8 (679) 年に倭馬飼部造連を大使とした多禰嶋への遣使が行われたが (表2-2)、朱鳥元 (686) 年9月に大隅・阿多準人とともに倭・河内馬飼部造が天武の殯宮で誅を行っているのも (表2-10) このことを示唆する。よって、天武期がヤマト国家と阿多準人との接触期であり、移住期であると考ええる。



次に、7世紀後半の大隅隼人の「大隅」については国制施行後の大隅国のうちの半島部を主体とする呼称<sup>(52)</sup>と考えられている。しかし、阿多隼人の「阿多」に関して検討したように、「大隅」も大隅半島という広範な地域を示すとは思えない。大隅隼人とは大隅直一族とその配下であり、地域的にも限られた範囲なのではなかろうか。

「割=日向国肝坏、贈於、大隅、始羅四郡、始置=大隅国」(『統紀』和銅6〈713〉年4月乙未条)とあるように、大隅国は4郡からなっていた。このうち大隅郡については、大隅半島の東岸から西岸にかけての広大な地域が郡域と考えられている<sup>(53)</sup>。中世には大隅郡は消滅し、江戸時代に再びその呼称が復活する。郡名が国名と同一であることから、国名を生ずる以前からこの地域の中心であったろうこと<sup>(54)</sup>と、江戸時代の大隅郡の郡域から古代の大隅郡域は復元されている。

中村氏は、前方後円墳を含む高塚古墳が分布する志布志湾岸部を大隅郡の中心とし、大隅直一族の本拠地であるとする<sup>(55)</sup>。志布志湾岸部は現在では曾於郡に属することから、曾君の本拠地であるとする説もあるが、この地域が曾於郡となったのは明治時代である<sup>(56)</sup>ことを考えると、大隅直一族の本拠地とする方が妥当であろう。7世紀後半の「大隅」とは、志布志湾岸部の肝属郡や中世に下大隅と呼称されていた垂水市・鹿屋市付近と考えておきたい。

また、天武14年大隅直は他の十氏とともに忌寸を賜姓された。この時点ですでに「直」を有していること、十氏に阿多君は入っていないことから、大隅直氏の方が早くヤマト国家との関係を有していたと言える。大隅半島(志布志湾岸部)と種子島が関係深いこと、志布志湾岸部の勢力が貝輪交易の東岸ルートに関与していたことは前述した。舒明元年に「掖玖」(種子島・屋久島)<sup>(57)</sup>へ田部連が派遣されたが、その際志布志湾岸部を中継地としたのではないか。大隅隼人は7世紀前半にヤマト国家との関係を有した可能性がある。

以上、覓国使剽劫事件に参加のなかった阿多隼人と大隅隼人に関して検討したが、いずれもその本拠地は南島との交通を有していることがわかった。

## ②薩摩・大隅半島居住の隼人と南島

次に覓国使剽劫事件に参加した隼人の本拠地について検討して行きたい。1章②で述べたように、貝輪交易の中継地は弥生中期後半～古墳初頭頃には中継地が薩摩半島南端部に移った。薩摩半島南端部とは河辺郡・額姪郡・揖宿郡にあたり、その郡名から衣君氏の本拠地であることがわかるが、この3郡は1・2郷からなっており、評制下には衣評という一つの地域だった可能性がある。事件の際、衣君は衣評督と助督であり衣評のミナトから覓国使は南島へと向かった可能性があるのではなかろうか。額姪郡には遣唐使が停泊した石籬浦に比定される石垣浦が存在し(表4-11)、ミナトの機能が確かめられる。

薩末氏の本拠地については考古学の成果や史料からは南島との交通を確かめることは出来ないが、表4を見れば、中世に中国や朝鮮との交通がうかがえるミナトには2・3(薩摩郡・日置郡-薩摩君氏の勢力地)がある。中世と古代を同一視はできないが、近世・近代になってもミナトとして利用されていたことから、自然環境や地形などからみた立地がミナトとして適していたことはわかる。

また、大隅半島西岸部の勢力も、薩摩半島南端部の勢力と結ぶことにより、貝輪交易(西岸ルート)に関与した可能性がある(1章②)。根占港と山川港は、中世～現代に至るまで両半島を結

	ミナト	年代	所在地	備考	出典
薩摩半島	1 串木野湊	中世後期～	串木野市東島平町	島津義久が朝鮮出兵の際、出航	◇
	2 市来湊	中世前期～	日置郡市来町湊町	朝鮮・中国との交易	◇
	3 帆ノ港	同上	日置郡日吉町帆ノ港	倭寇の根拠地の一つとして朝鮮・中国との交易、物資の集積地	●
	4 入来名湊	同上	日置郡吹上町入来	鎌倉期は北条氏領	●
	5 万之瀬川河口	同上	日置郡金峰町松田南	鎌倉期は北条氏領。300m先の持鉢松遺跡は中世前期の交易の拠点	●
	6 坊津	古代～	川辺郡坊津町	古代～中世の代表的な港	◆
	7 博多浦	中世～	川辺郡坊津町久志	中世～近世の薩摩藩の外交貿易上の要港	◆
	8 相之浦	同上	川辺郡知覧町南別府	4 km先の竹迫川河口からは13C～16Cの貿易陶磁が出土	◆
	9 門之浦	近世～	同上	海商覚兵衛の基地（沖縄－大坂－北海道）	◆
	10 大川浦	同上	揖宿郡額娃町別府	1665年浦となる	◆
	11 石垣浦	古代～	同上	遣唐使停泊の石離浦カ。室町時代倭寇の寄港地	◆
	12 山川港	中世前期～	指宿市十二町、揖宿郡山川町	中世には坊津に次ぐ港。江戸時代は坊津に代わり中心的役割を果たす	◆
	13 揖宿湊	近世～	指宿市十町	江戸後期、豪商浜崎太平次の貿易基地	◆
	14 浜之市湊	中世前期～	始良郡隼人町真考	湊には市場が栄える。米蔵が存在	◇
大隅半島	15 古江浦	近世～	鹿屋市古江町	鹿児島城下から肝属地方に往来する際の定場	◇
	16 高須浦	中世～	鹿屋市高須町	大隅半島西岸第一の要港	◇
	17 根占港	中世前期～	肝属郡根占町川北	対岸の山川港とともに鹿児島湾内の港として重視される	●
	18 神川河口	近世～	肝属郡大根占町神川	神川・堂之本は海上交易（琉球・大坂・長崎）の基地	◇
	19 内之浦	中世前期～	肝属郡内之浦町南方	海運・漁業・商業の中心地	★
	20 波見港	中世～	肝属郡高山町波見	密貿易の根拠地。島津氏の三州制	★
	21 唐仁浦	中世後期～	肝属郡東串良新川西町	圧後は南蛮貿易港	★
種子島	22 志布志津	中世～	曾於郡志布志町志布志	朝鮮・中国南西諸島を結ぶ貿易港中心は近世。南西諸島を通じての交易も大きい	★
	23 浦田浦	近世～	西之表市国上浦田	国内・琉球・中国との交易	◆
	24 赤尾木浦	同上	西之表市西之表	島内からの年貢米の集積地。薩庁との往来、国内外との交易	◆
	25 住吉浦	同上	西之表市住吉中之町	西岸有数の良港。琉球貿易	◆
	26 島間浦	同上	熊毛郡中種子町島間	琉球・大坂・鹿児島との交易	◆
	27 熊野浦	同上	熊毛郡中種子町坂井	鉄砲伝来の翌年、南蛮船再来	◆
	28 庄司浦	中・近世	西之表市現和庄司浦	平安以来、年貢の積み出し港。琉球貿易	◆
屋久島	29 湊	近世～	西之表市国上湊	自然の良港。中国・琉球との交易	◆
	30 一湊	中世～	熊毛郡上屋久町一湊	14～16Cの貿易陶磁が出土	◆
	31 栗生川河口	近世～	熊毛郡屋久町栗生	南の島々との中継地として栄えた	◆
	32 安房港	同上	熊毛郡屋久町安房	屋久杉の積み出し港。大船も往来出来る	◆
	33 宮之浦	古代～	熊毛郡上屋久宮之浦町	益教神社アリ	◆
奄美大島	34 津代港	近世～	大島郡笠利町手花部	島津藩と黒砂糖交易の拠点	◆
	35 赤木名港	同上	大島郡笠利町外屋久	砂糖などの積み出し港	◆
	36 龍郷湾	中世～	大島郡龍郷町	役人の交替、砂糖の積み出し港	◆
	37 名瀬港	同上	名瀬市塩浜・大熊町	中世一交易、近世一砂糖の積出し	◆
	38 恩勝港	近世～	大島郡大和村恩勝	砂糖の積み出し	◆
	39 焼内湾	中世～	大島郡宇検村湯湾	貿易港	◆
	40 戸口港	近世～	大島郡龍郷町戸口	河口を中心にした集落で交易	◆
	41 節田港	中世～	大島郡笠利町節田	中国と交易を行っていた頃の青磁出土	◆
	42 湊グスク	同上	大島郡笠利町用安	東岸の貿易港	◆

表4 前近代のミナト（鹿児島県本土・種子島・屋久島・奄美大島）

出典の略号は次の通り：◇『鹿児島県の地名』（平凡社、1998）、●柳原「中世前期南九州の港と宋人居住地に関する一考察」（『日本史研究』448、1999）、◆『歴史の道調査報告書3』（鹿児島県教委、1995）、★『歴史の道調査報告書5』（鹿児島県教委、1997）。

ぶミナトであること、山ノ口式土器の分布や墓制の共通性からも、弥生中期後半以来両地域の密接なつながりがわかる。大隅半島西岸の大根占・根占の地域（現錦江町・南大隅市）については、『和名抄』の大隅郡七ヶ郷のうち瀬寝郷にあてるとある考えもあるが、肝属郡4ヶ郷のうち川上郷は、錦江町城元にある河上神社を中心とした地域であると言われており<sup>(58)</sup>、肝衝氏の本拠地と言えるのではないかと。

以上見てきたように、衣君・肝衝氏の本拠地については南島との交通が確かめられ、薩摩（末）氏の本拠地についても海上交通の要地であることが確かめられた。そして、これらの地域は弥生中期後半～古墳時代初頭の貝輪交易の西岸ルートと関係する。肥人も事件に参加しているが、肥人に関して中村氏は、肥国の沿岸部や島嶼部を拠点とした海人集団とされており<sup>(59)</sup>、貝輪交易に関与していた可能性はあろう。

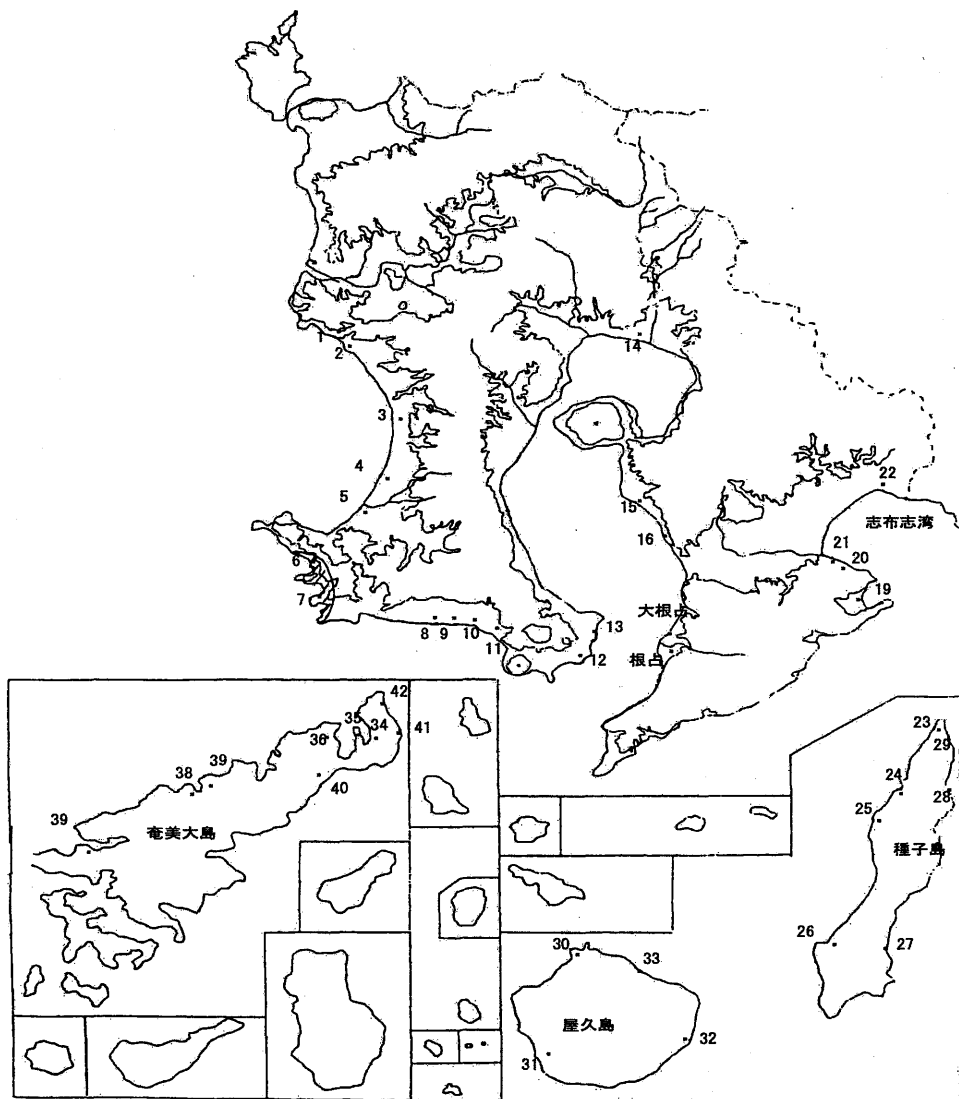
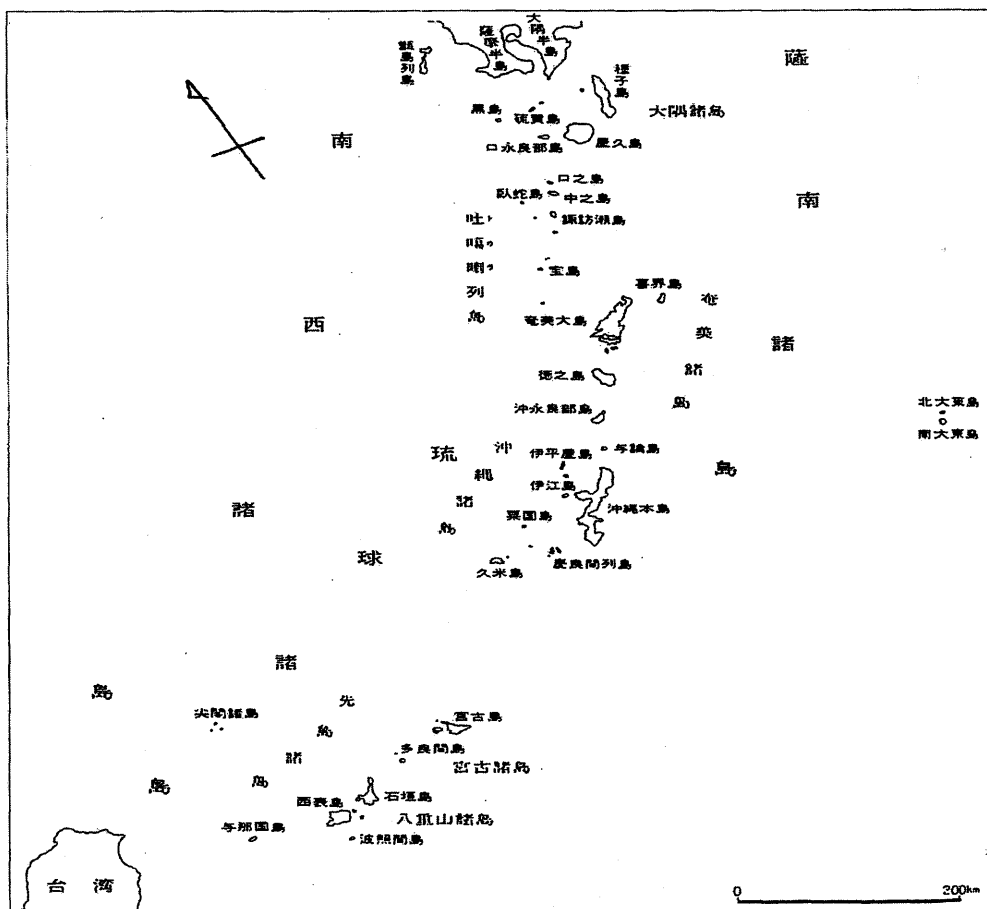


図2 前近代のミナト（鹿児島県本土・種子島・屋久島・奄美大島）

## おわりに

1～3章での検討の結果、少なくとも大隅半島には2つの隼人集団（a 志布志湾岸部－大隅氏・b 西岸部－肝衝氏）、薩摩半島には3つの隼人集団（c 北部－薩摩氏・d 西岸部－阿多氏・e 南端部－衣氏）が存在し、貝輪交易という視点で見ると、aは古墳時代（6世紀代）の東岸ルート、dは弥生前期～中期前半の西岸ルート、b・eは弥生中期後半～古墳時代初頭の西岸ルートと関連することがわかった。覓国使剽劫事件に参加した隼人が、大隅半島西岸部（肝衝氏）・薩摩半島北部（薩末氏）・薩摩半島南端部（衣君氏）であり、志布志湾岸部（大隅氏）と薩摩半島西岸部（阿多氏）の参加を欠くのは、南島との交通をめくり、在地における対抗関係の存在を示唆する。南島への遣使が本格化した天武期以降、国家の南島政策への対応をめくり差が生じたのであろう。

このように隼人が南島との交通を有することは確かめられたが、それが隼人主導の交易と言えるかは不明である。箕島氏は奄美大島を生産地とするヤコウガイ交易（6～7世紀）を隼人主導の交易と位置づけておられる<sup>(60)</sup>が、鹿児島県本土からヤコウガイ製品の出土は無く、隼人主導とは言えないのではないかと。種子島が重要な役割を果たしているように考えるが、ヤコウガイ交易の評価に関しては別稿に譲り、ひとまず擱筆したい。



付図 南島地図（鹿児島県教委『先史・古代の鹿児島 通史編』2006より）

註

- (1) 中村明蔵「南島覓国使と南島人の朝貢をめぐる諸問題」(『古代隼人社会の構造と展開』1998年、岩田書院) 181～184頁。
- (2) 田中聡「隼人・南嶋と国家－国制施行と神話－」(『日本史論叢』11、1987年) 64頁。
- (3) a 小林茂文「隼人の敗北と社会」(『続日本紀研究』252、1987年) 22頁。b 箕島栄紀「倭王権段階の南島社会と交流」(『国史学』170、2000年) 112頁。
- (4) 木下尚子「南海産貝輪の系譜」(『南島貝文化の研究・貝の道の考古学』1996年、法政大学出版局) 16～28頁。
- (5) 貝輪や貝釧、貝符などの貝製品の素材となったオッタノハは房総以南の西太平洋に広く分布するが、貝輪に適した大きさのオッタノハは、大隅諸島からトカラ列島の特定の場所にしか生息しない(黒住耐二「オッタノハの供給地」〈『南島考古』14、1994年〉61頁) こと、ゴホウラは奄美諸島・沖縄諸島から熱帯に分布すること、イモガイは本州・四国・九州の太平洋岸に多く生息するが、大型のイモガイは奄美大島以南に生息する(木下、註4論文、22～26頁) ことから、素材の供給地は南島と考えてよいであろう。
- (6) 日置市金峰町の高橋貝塚からは、前～中期を主体とした弥生土器とともに、ゴホウラ貝輪の未製品7個、オッタノハ貝輪の未製品6個が出土し、未製品には貝輪の消費地に合わせて腹面貝輪と背面貝輪があるらしい(木下「鹿児島県の古代貝文化」〈『鹿児島考古』33、1999年〉17～18頁)。やはり、高橋の地は貝輪の加工地(中継地)と考えてよいであろう。
- (7) 木下「南海産貝輪交易考」(註4文献に同じ) 161～162頁。
- (8) 『日本土器事典』(1996年、雄山閣) 404頁。
- (9) 木下、註6論文、24頁。
- (10) 藤尾慎一郎「九州の甕棺」(『国立歴史民俗博物館研究報告』21、1989年) 194頁。
- (11) 木下、註(7)論文、140～151頁。
- (12) 木下、註(7)論文、145頁。
- (13) 木下、註(7)論文、161～162頁。
- (14) 河口貞徳『日本の古代遺跡 38』(1988年、保育社) 64頁。
- (15) (16) 木下、註(6)論文、36頁。
- (17) 西岸部地域の海洋性への変化は、約4000年前の開聞岳の噴火による植生破壊や気候の寒冷湿润化が原因として考えられている(河口、註14著書、63～66頁)。
- (18) 木下、註(7)論文、146頁。
- (19) 木下、註(7)論文、164頁。
- (20) 註(8)文献、405頁。
- (21) 松木蘭式土器は、甕や壺に中九州との近縁性を示しつつも、山ノ口式土器に系譜をたどれる壺や大甕を取りこんでいるらしい(本田道輝「松木蘭遺跡」『先史・古代の鹿児島 遺跡解説(資料編)』2005年、鹿児島県教育委員会、229頁)。
- (22) 木下、註(7)論文、172頁。
- (23) 立石に地元の山ノ口式土器とともに、北九州から移入された丹塗り研磨した須玖式土器を供献する(河口、註14文献、92頁)。

- (24) 河口、註(14) 文献、93頁。
- (25) 木下、註(7) 論文、151頁。
- (26) 木下、註(7) 論文、164頁。
- (27) 木下「古墳時代の貝釧・貝の道」(註4 文献に同じ) 293～328頁。
- (28) 木下「貝製装身具からみた広田遺跡」(『種子島広田遺跡』2003年、鹿児島県立歴史資料館黎明館) 329～347頁。
- (29) 木下、註(28) 論文、347～348頁。
- (30) 木下、註(7) 論文、155頁。
- (31) 木下、註(7) 論文、169頁。
- (32) 小園公雄・中村明蔵「南九州離島における歴史的集落の形成について」(『南九州地域科学研究所報』15、1998年) 2頁。
- (33) 『中種子町埋蔵文化財調査報告書 3』(中種子町教育委員会、1996年) 91頁。
- (34) 註(33) 文献、92頁。
- (35) 下野敏見「道之島の風と潮 I」(『南西諸島の民俗 I』1980年、法政大学出版局) 244頁。
- (36) 『類聚三代格』天長元年9月3日太政官奏。
- (37) 永山修一「天長元年の多敷嶋停廃をめぐって」(『史学論叢』11、1981年) 189頁。
- (38) 小林茂文、註(3) a 論文、19～21頁。
- (39) 中村、註(1) 論文、181～184頁。
- (40) 山尾幸久「遣唐使－律令国家におけるその意義と性質－」(『東アジア世界における古代史講座6』所収、1982年、学生社) 215頁。
- (41) 中村「大隅と阿多－その歴史的地域性の差異について－」(『隼人の研究』1977年、学生社) 59頁。
- (42) a 中村、註(41) 論文、61頁。b 『鹿児島県の地名』(1998年、平凡社) 90頁。
- (43) 註(14) 文献、53頁。
- (44) 田中、註(2) 論文、60～61頁。
- (45) 職員令集解の隼人司条に「古記」が引用されており、確実であろう。
- (46) 永山修一「隼人司の成立と展開」(『隼人文化』22、1989年) 28頁。天武14年の大隅直への忌寸賜姓を「前隼人司」の成立に関連すると見ておられる。
- (47) 註(42) b 文献、90～92頁。
- (48) 中村「熊襲と隼人をめぐる諸問題」(註41文献に同じ) 37頁。
- (49) 小林敏男「クマソ・ハヤトの問題の再検討」(『鹿児島短期大学紀要』31、1983年) 35頁。
- (50) 下野、註(35) 論文、243～244頁。
- (51) 田中、註(2) 論文、56頁。
- (52) 中村、註(47) 論文、64～71頁。
- (53) 中村、註(52) に同じ。
- (54) 註(42) b 文献、542頁。
- (55) 中村「隼人の豪族、曾君についての考察」(註41文献に同じ) 97頁。
- (56) 註(55) b 論文、96頁。

(57) 7世紀の「掖玖」に関しては、別稿を用意したい。

(58) 『角川日本地名辞典 46』(1983年、角川書店) 955頁。

(59) 中村「肥人をめぐる諸問題」(『熊襲・隼人の社会史研究』1987年、名著出版) 154～155頁。

(60) 簗島、註(3)b論文、111～112頁。

## Nanto (南島) and Hayato (隼人)

—A historic background of the case that Hayato (隼人) caused in the year of Monmu 4th (700)—

TAKEMORI Tomoko

The messenger whom that was sent to by the central government was attacked with A.D.700 from Hayato (隼人). It was Hayato (隼人) of the Satsuma Peninsula southernmost (enokimi - 衣君 -) and Satsuma Peninsula northern part (satuma - 薩末 -) and Osumi Peninsula west coast (kimotuki - 肝衝 -) that caused a trouble. These have all Nanto's and interchanges.

The background of a matter is the interchange of Nanto (南島) and Hayato (隼人).

Traffic with Nanto (南島) can be confirmed with kimotuki (肝衝) and enokimi (衣君) before long. Though direct relations couldn't be confirmed, satuma (薩末) had the function of the port in that power area.

Negotiations of Hayato (隼人) and Nanto (南島) are background of attack.

Osumi (大隅) and Ata (阿多) which are a Overseer of the Hayato Militia (隼人司) and emigrate to the kinai district (畿内) do not participate in attack. However, there is traffic with Nanto (南島) with both.

Traffic with Nanto (南島) generated an opposition in a place of residence of Hayato (隼人).